

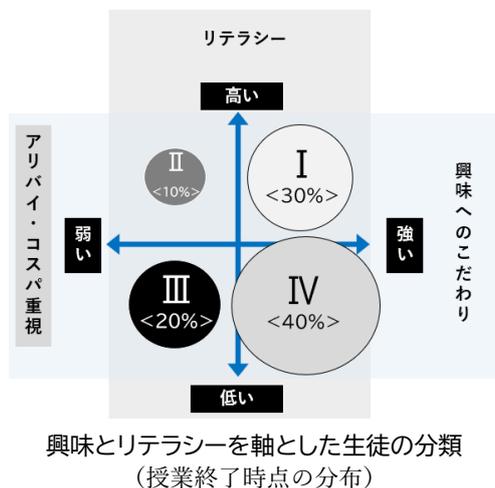
「興味」と「リテラシー」からみた生徒

アリバイ・コスパ学習観からの脱却できる？

探究学習における生徒理解

卒業論文をうまくやり遂げることのできる生徒と、そうでない生徒の特徴について分析したい。以下に述べるのは、探究学習を進める上での生徒理解のひとつの視点だ。

探究学習に付き合っていると、「読み書きの力があるのに、面白くなさそうでいかにも手抜きの学びだな…」と感じる生徒がいる。一方で「力はいまひとつだけと自分の興味で頑張ってるなあ!」、という生徒もいる。こうした研究主題への「興味へのこだわり」の強弱と、「リテラシー」の高低を軸として、生徒を分類したのが右図である。

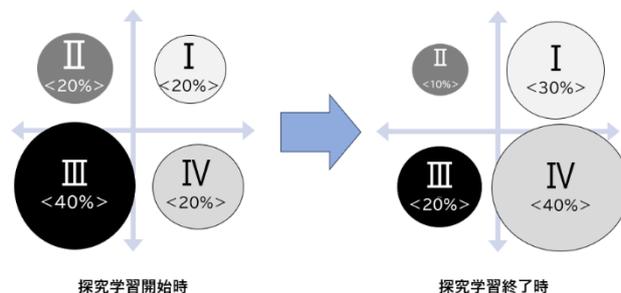


- 第I象限 (右上)：興味への強いこだわりとともに、リテラシーも高い集団
- 第II象限 (左上)：興味へのこだわりが弱いが、リテラシーは高い集団
- 第III象限 (左下)：興味へのこだわりが弱く、リテラシーも伴わない集団
- 第IV象限 (右下)：興味へのこだわりを持つものの、リテラシーはそれほどでもない集団

さて、それぞれの集団の割合は、「I」から反時計まわりに、おおよそ3割・1割・3割・4割である。感覚的な判断である。見方を変えると、自分の題材に興味を持って、卒業論文を終えた生徒が右半分の約7割、そうでない生徒が左半分の3割である。

興味へのこだわりは変わるが、能力はそれほど変わらない

ときに、この分布は探究学習の開始時から固定してはいない。時間の経過とともに、全体が左半分 (I・III) から右半分 (I・IV) に移る傾向がみられる。それを示したのが右図である。これもまた感覚的なものだが、授業での様々な働きかけによって、自らの興味にこだわっていく生徒が次第に増加していく。全体として、最終的にはそうした興味こだわり群の生徒が全体として7割にまで増えるという感触がある。



一方、比較的リテラシーの高い生徒は4割、そうでない生徒は6割であり、その割合は探究学習を通じてそれほど変わらないように思われる。

各集団の特徴

各象限について、それぞれについて思い当たることを記しておこう。

第Ⅰ象限の生徒からは優れた作品が生まれてくる。将来の進路や職業を見据えた、あるいは、それらを予感して取り組んでいるような場合も多い。例としては、クラシックコンサート専門のホール、高松塚古墳、ドクターヘリ、地獄絵…などいくつもの作品がすぐに思い浮かぶ。

第Ⅱ象限の生徒には女子が多いようだ。同時に「取り組みやすい題材」が頻繁に現れる。興味よりもアリのバイやコスパを重視する集団である。具体的な研究主題としては、犬や紅茶・チョコレート・色など。共通しているのは、資料が豊富にあり、友達の手前、それなりに見栄えが良さそうな題材を選ぶ。開始当初は薬剤師と言いつく生徒もいるが、興味のなさを指摘されほとんどが撤退する。要は、常識の範囲で何とか“当たりがつく”題材で研究をしがちなのがこの集団だ。特徴として共通しているは「おわりに」に書かれる動機の弱さだ。具体的なエピソードが薄く、分量が少ない。とはいうものの、かれらの論文作成は表面上順調で、ルールを守ったピースがそれなりに増えていく。手がかからないので、支援者側も余り注目せずにいるのだけれど、論文が完成に近づくと「自身が好きなことを確認するだけ」「引用ばかりでコメントが伴わない」論文になりがちで、ここに来て興味の弱さが露見する場合も多い。愛称のアイデアとしては「ハカセちゃん」だ。「調べました学習で事足りる」という誤解、「知識のコレクション・引用と羅列で論文ができる」という誤解をしているため。

第Ⅲ象限は最後まで論文がしあがらない厄介な集団だ。さきの第Ⅱ象限のハカセちゃん集団のように取り組みやすそうな題材を選ぶ一方、とにかく好きな事柄、目先夢中なゲームのタイトルを選んだりもしがちだ。ウケを狙った題材を選ぶ男子生徒も多い。図書館から資料を様々にレファレンスしたとしても、読み書きの力、そして気力もないので、作業は思うように進まない。結局のところ、何度も題材を変えながら興味がわからないまま最終局面を迎える場合も多い。追い詰められてか、授業中暗い液晶画面をあたかも内観法のように見続けて時間の経過を待つような生徒も時に現れる。こうした生徒のうちの10数名(学年の約10%)は居残りを経ても、仕上げられないまま時間切れになる。そうした学習観がなぜ育ってしまったのか、探究学習支援の研究において、最も興味深い集団と言える。

第Ⅳ象限は面白い集団である。リテラシー的にはいまひとつで執筆はなかなか進まない。しかし、よく読んでるので、インタビューするとかなりの言葉があふれ出る。「おわりに」も個人的なエピソードが豊かだ(とはいえキーボードが得意でないので分量も少ない)。ほとんどが論文を提出できるものの、中には自分の書いたものに不満が残り、「提出できません」といって、学年末に積極的に居残って書いていく生徒もいる。それどころか、次の年まで引きずって高校になっても研究を続けるようなタイプもいる。こうした生徒の伸び代は大きく、添削される中で文章が上達する場面にもであう。場合によっては、学力もそれに引きずられるように高くなり推薦入試に合格したり、特待生を獲得し卒業する生徒もいた。

このように授業で問題になるのは、第Ⅱ・Ⅲ象限(図左側)の生徒たちだ。どんな働きかけが、興味にこだわらないアリのバイ・コスパ学習観から彼らが脱却させるのか。その手法・ドラマは別稿に譲ろう。

